

2013年6月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

人生と信仰

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「分別功德品」

1. 分別功德品の概要

- (1) 如来の寿命長遠を信解した人の功德を十二項目に分けて説く。
- (2) 本門の流通分に入る。
 - ① 四信（ししん）の教えを説く
 - ② 五品（ごほん）の教えを説く

2. 如来寿量品の要点

「仏の本体は、宇宙の万物を生かしている久遠実成の本仏であり、つねにわれわれと共にいてくださる不生不滅の存在である」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 169）

3. 生きがいを知る大功德（同p. 170～173）

(1) 十二項目の功德

「われわれは無始無終・不生不滅の久遠実成の本仏に生かされているのだ」という真実を信解した人が得られる十二項目の功德が説かれています。（【参考】仏の境地に向かう十二項目の功德を参照）

(2) 十二項目の功德の意義

信仰の根本さえつかむことができれば、その信仰をますます深めていく力も、それを他へおしひろめていく力も、ともに無限に湧いてくることを教えられているのです。そして、その信仰に徹していけば、いつかはかならず仏さまとおなじような究極のめざめの世界にたっせられるのだという、最大最高の功德も約束されています。

(3) 光明

仏の境地にたっするのは、なみたいていの修行ではできません。（中略）しかし、正しい信仰をもち、そして努力さえすれば、いつかはお釈迦さまとおなじようになれるのだという真実は、われわれ人間にとって、なんと大きな光明でしょう。この光明のあるかぎり、すべての人の人生はじつに生きがいのある、楽しいものになるのです。

(4) 空虚な人生

ただお金をもうけたり、損したり、恋愛をしたり、失恋したり、ながいあいだかかって高い地位を得たかとおもうと、ちょっとの失敗でそれを失ったり……こうしてむなしい喜びや悲しみをくりかえしながら一生をすごす……その瞬間瞬間はなんとなく充実しているように感じて、死ぬ間際に一生をふりかえてみると、それらがみんな〈我執〉に踊らされ、影を追ってあくせくしていたにすぎないことがわかり、いいしれぬ空虚感をおぼえるにちがいありません。

(5) 〈信仰〉という背骨

ところが、形の上ではそれと似たような苦しみや悲しみや喜びのくりかえしの一生でも、その人生をつらぬく〈信仰〉という一本のつよい背骨があったならば、そして、形のうえでは浮きつ沈みつしながらもつねに仏の境地へ一步一步上ってゆきつつあるのだという〈確信〉があったならば、どんなに苦しい生涯でも、楽しく生きていくことができ、楽しく死んでいくことができましよう。

(6) うんざり

われわれの生命は、この世かぎりで終わりになるものではありません。ですから、つぎの世も、またつぎの世も、ただもう日常生活に起こるさまざまな事件に喜びと悲しみをくりかえし、それが永久につづいていたり、さらには人間としての生どころか、地獄界や畜生界などの悪趣をも輪廻していくのだということがわかったら、考えただけでもうんざりしてしまうでしょう。

(7) 充実

それと反対に、真の信仰をもちえたものは、つねに一步ずつでも仏の境地へ近づいていくという自覚がありますから、どんな長い旅路でも、けっして飽きることがないのです。いつも希望に満ち、充実した生きかたができるわけです。これこそ、真の信仰者のみが得られる大功德というべきでありましよう。

(8) 人々と共に

しかも、真の信仰者の努力というものは、ただ自分だけが仏の境地にたっすることを目的とするものではなく、できるだけおおくの人を道連れにしてあげたいという努力をともなっているのですから、真の信仰者がふえればふえるほど、人類全体が向上してゆき、この世界が理想の寂光土に近づいていくのです。

4. 序分・正宗分・流通分

(1) 経文を序分・正宗分・流通分に分けて考えることがあります。

① 序分 (じょぶん)

そのお経が説かれたいきさつ、対象者、大要などが書かれたある部分で、正宗分に入るいとうち。

② 正宗分 (しょうしゅうぶん)

そのお経の本論であり、中心となる意味をもった部分。

③ 流通分 (るつうぶん)

正宗分に書いてあることをよく理解し、信じ、そして身に行なえば、こういう功德がある、これを大切にして世にひろめる者にはこんな加護があるということを説いた部分。

(2) 妙法蓮華經の分析

① 迹門

序 分：序品

正宗分：方便品、譬諭品、信解品、藥草諭品、授記品、化城諭品、五百弟子受記品、授学無学人記品

流通分：法師品、見宝塔品、提婆達多品、勸持品、安樂行品、

② 本門

序 分：從地涌出品の前半

正宗分：從地涌出品の後半、如来寿量品、分別功德品の前半

流通分：分別功德品の後半、隨喜功德品、法師功德品、常不輕菩薩品、如来神力品、囑累品、藥王菩薩本事品、妙音菩薩品、觀世音菩薩普門品、陀羅尼品、妙莊嚴本事品、普賢菩薩勸発品

(3) 迹門と本門

① 迹門

迹門とは、迹仏の教えのこと。「迹仏」とは、この世に実際にお生まれになり、修業の結果、仏の境地に達せられ、八十歳で入滅された釈迦牟尼世尊のことです。

迹門では、人間として正しく生きること、人間関係を正しくたもつことを教えられました。

迹門の教えの中心は「仏の智慧」であるといっていでしょう。

② 本門

本門とは、本仏の教えのこと「本仏」とは、如来寿量品で説かれた無始無終・不生不滅の久遠実成の本仏です。

本門では、本仏と人間との関係、すなわち本仏の救いについて述べられています。

本門の教えの中心は、「仏の慈悲」であるといっていでしょう。

5. 本門の流通分(同p. 173)

分別功德品の後半から、本門の流通分に入ります。ここでは、次のことが説かれます。

- ・功 徳：正しい信仰をもてばどのような結果があらわれるか
- ・心 が け：正しい信仰をもつにはどのような心がけが必要か
- ・委 嘱：釈迦牟尼世尊がすべての仏弟子（私たちを含む）に「正しい信仰をのちの世までも説きひろめよ」と委嘱します。

6. 流通分の功德 (同p. 174~176)

(1) 二種類の功德

- ① この《分別功德品第十七》に説かれた功德は、信仰上の功德です。心に得られる功德です。次の《随喜功德品第十八》の前半も、おなじ功德が説かれています。
- ② ところが、その後半以降には、われわれの身の上や日常生活にあらわれる功德も説かれているのです。

(2) 完全な信仰

- ① 人によっては「そういう（われわれの身の上や日常生活にあらわれる）功德について聞く必要はない。《法華経》の中心である〈一品二半（従地涌出品の後半・如来寿量品・分別功德品の前半＝本門の正宗分）〉を徹底的に学び、その教えをしんそこから理解し、仏の無量寿と、われわれも本来、本仏と一体なのだということを心から信ずれば、それでいいのだ」と考えることもありましょう。それが完全にできれば、りっぱです。完全な信仰です。
- ② しかし、そんな人は万人に一人いるか、十万人に一人いるか……現実の問題としてはなかなかむずかしいことです。

(3) 流通分の第一の大切さ

- ① おたがい凡夫の悲しさで、理想の境地が説かれただけでは、なんだか自分からかけはなれた遠い世界のようにおもわれるのです。
- ② やはり、身近な問題として、日常生活に即して説かれたとき、教えがいきいきと感じられます。ここに〈流通分〉の第一の大切さがあるのです。

(4) 流通分の第二の大切さ

- ① また、凡夫の心はともすればゆるみがちになります。教えのありがたいことはよくわかっている、ただ頭のうで「ありがたい教えだ」という理解をもつだけでは、いつしか懈怠におちいることも起こりえます。
- ② ところが、「正しい信仰をもち、身に行えば、現実にこういうふうに向していくのだ」と説かれてある経典を、つねに読誦すれば、ゆるもうとする信仰心が、そのたびにひきしまってくるのです。これが〈流通分〉の大切さの第二です。

(5) 流通分の第三の大切さ

また、仏さまは、われわれのような凡夫にたいしてさえ、「この教えを説きひろめてくれよ」と依頼してくださっています。ありがたいことです。そのおことばを拝し、そのみ心を察するごとに、いいしれぬ励みをおぼえるのです。大勇猛心をふるい起こすのです。これが〈流通分〉の大切さの第三です。

7. 四信（同p.176～178）

釈迦牟尼世尊ご在世中の信仰のありかたを四つの段階に分けたもの。

(1) 一念信解（いちねんしんげ）

仏さまの生命の無量であることを、一念にでも信解することの大切さ。

(2) 略解言趣（りやくげごんしゅ）

一念に仏の無量寿を信解するばかりでなく、その教えに含まれる大きな意味を、あらまし理解すること。

(3) 広為他說（こういたせつ）

教えに説かれた真実をほぼ理解するだけでなく、法華経の教えを学び、忘れず、帰依と感謝のまごころをささげ、世の人々にもすすめて教えを聞かせ、仏道に引き入れてあげること。

(4) 深信観成（じんしんかんじょう）

仏の無量寿にたいする信解が深まって、いつも仏さまが自分といっしょにおられるのだということを実に感じるようになった境地。

8. 五品（同p.178～179）

釈迦牟尼世尊ご入滅後における信仰者のありかたとその功德を五つに分けて説かれているもの。

(1) 初随喜（しょずいき）

仏の無量寿を聞いて、頭のうで理解するだけでなく、「ああ、ありがたい」という歓喜の念を起こすこと。

(2) 読誦（どくじゅ）

仏の無量寿の教えを一心に学び、誦んじ、しっかり心にたもつようになること。

(3) 説法（せっぽう）

仏の無量寿の教えがしみじみとわかり、人にも説いてあげずにはおられなくなること。

(4) 兼行六度（けんぎょうろくど）

仏の無量寿の教えを受持し、読誦し、説法するという行に兼ねて、不完全ながら六波羅蜜を行ずるようになった段階。

(5) 正行六度（しょうぎょうろくど）

仏の無量寿の教えを受持し、読誦し、説法し、書写し、人にも書写をすすめると共に、六波羅蜜を完全に行ずるようになった段階。

10. 四信・五品と私たちの人生

(1) 信解の深まり

四信の教えも五品の教えも、私たちが仏の無量寿を信解し、信解が次第に深まっていく過程を表しています。

すなわち、仏の境地に一步、一步近づいていくプロセスを語っていると言ってよいでしょう。

(2) 人生の選択

あなたはどれの人生を選択なさいますか。

- ① 四信・五品に示されるような、理想へ向かって永遠に向上する道を歩む人生を選びますか。
- ② 自分本位に明け暮れ、永遠に悪趣を輪廻する人生を選びますか。

【参考】 仏の境地に向かう十二項目の功德

| | | |
|----|-------------------------------------|---|
| 1 | むしょうぼうにん 無生法忍を得る | 決して変化しない真理に生かされていることを悟り、どんなにものごとが変化しても揺るがなくなる |
| 2 | もんじだらにもん 聞持陀羅尼門を得る | 教えを聞くことによって、あらゆる悪をとどめ、あらゆる善をすすめる力を得る |
| 3 | ぎょうせつむげべんざい 楽説無礙弁才を得る | みずから願って法を説き、いかなる妨げをも乗り越えて自由自在に法を説く力を得る |
| 4 | せんだらに 旋陀羅尼を得る | 悪をとどめ善をすすめる力を、次から次へと限りなく及ぼしていく能力を得る |
| 5 | ふたい ほうりん 不退の法輪を転ず | どんな障害や困難にもたじろぐことなく、どこまでも法を説きひろめていく能力を得る |
| 6 | しょうじょう ほうりん 清浄の法輪を転ず | なにひとつ報いを求めない清らかな心で法を説きひろめるという境地にたつする |
| 7 | あのかたらんみゃくさんぼだい 八生に阿耨多羅三藐三菩提を得る | 八度生まれ変わるあいだ仏の教えを修行して、最高の悟りを得る |
| 8 | あのかたらんみゃくさんぼだい 四生に阿耨多羅三藐三菩提を得る | 四度生まれ変わるあいだ仏の教えを修行して、最高の悟りを得る |
| 9 | あのかたらんみゃくさんぼだい 三生に阿耨多羅三藐三菩提を得る | 三度生まれ変わるあいだ仏の教えを修行して、最高の悟りを得る |
| 10 | あのかたらんみゃくさんぼだい 二生に阿耨多羅三藐三菩提を得る | 二度生まれ変わるあいだ仏の教えを修行して、最高の悟りを得る |
| 11 | あのかたらんみゃくさんぼだい 一生に阿耨多羅三藐三菩提を得る | もう一度生まれ変わるあいだ仏の教えを修行して、最高の悟りを得る |
| 12 | あのかたらんみゃくさんぼだい おこ 阿耨多羅三藐三菩提の心を発す | 仏の悟りを得ようという志を起こす |